

狐岱遺跡について

— 1989年の範囲確認調査から —

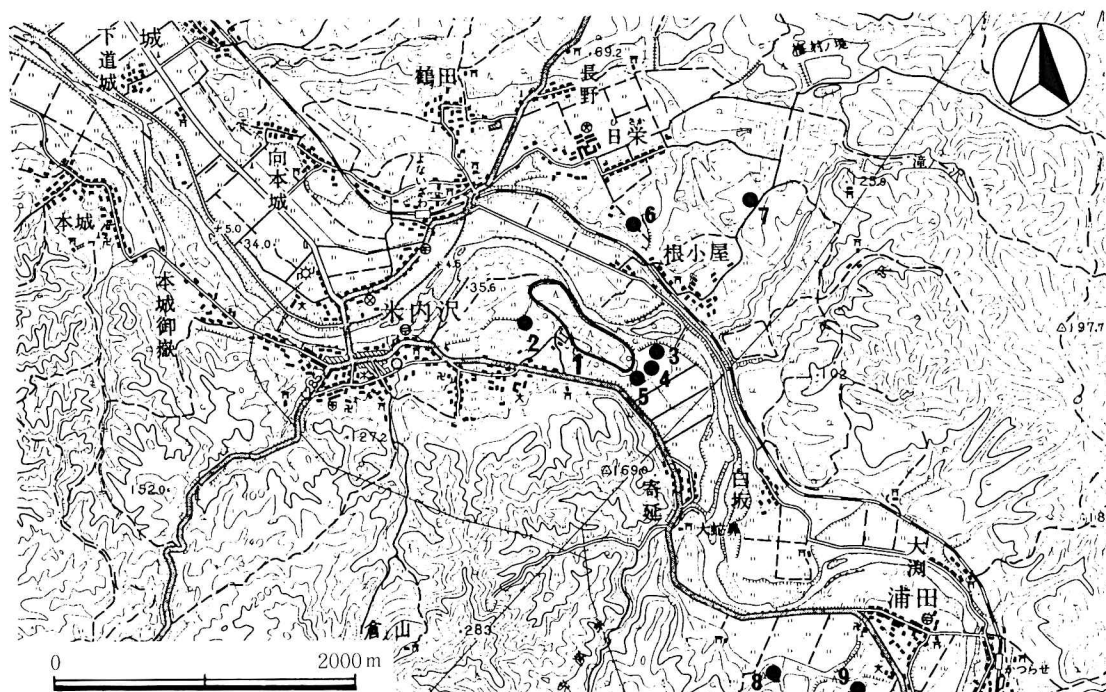
大 野 憲 司

1 はじめに

狐岱遺跡は、秋田県北秋田郡森吉町米内沢字狐岱88番地、外に所在する縄文時代の遺跡である。この遺跡は昭和29年、当時県立鷹巣農林高校の教諭であった大和久震平氏によって発掘調査が行われ、^(註1)縄文時代前期後葉から中期前葉の円筒土器を出土する遺跡として知られるようになった。

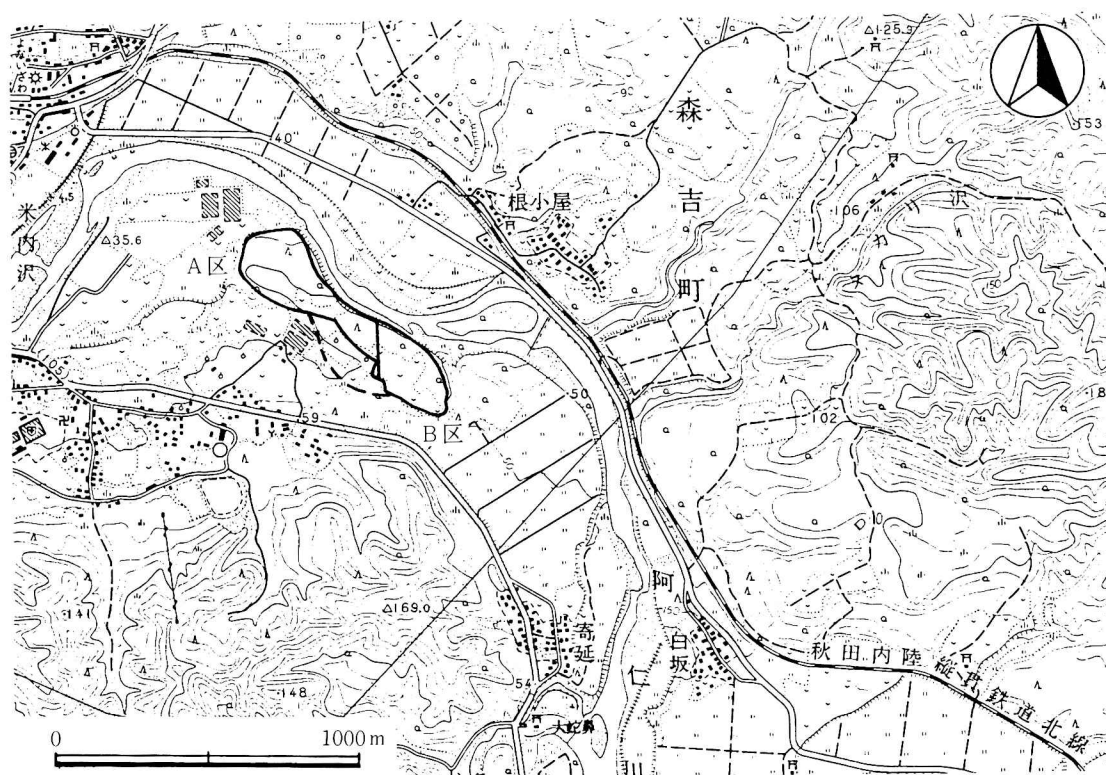
その後、遺跡は杉を主とする造林地及び畑地として利用されていたが、本遺跡を含む広い範囲に、森吉山ダム建設事業に伴って水没する水田の代替地として、農地造成が計画された。このため秋田県教育委員会は、昭和63年10月18～20日に遺跡分布調査を、^(註2)平成元年6月13日～6月30日に遺跡範囲確認調査を実施した。^(註3)その結果、本遺跡は主に縄文時代前期後葉～後期前葉の大規模な集落跡であることが判明し、その概要については、秋田県文化財調査報告書第201集『遺跡詳細分布調査報告書』1990（平成2年）に掲載した。ここでは、狐岱遺跡の中でも特に遺構・遺物が多く、前記報告書に掲載しきれなかったA区について、その主要な部分を報告するものである。なお、狐岱遺跡はその後の協議によって、同時に調査した吉野Ⅰ・Ⅱ遺跡、山崎遺跡と共に、遺跡地内全域が、盛土された後水田化されることになり、遺跡は保存されることになった。

狐岱遺跡の範囲確認調査は、調査対象面積が126.200m²と広大であること、現地には杉の切り株が残り、伐採後の枝等が散乱し笹の根なども多いことから、トレンチの掘削にはバックホーを用い、その後を人力で精査した。トレンチは幅約1mのものを、第3図のように40m間隔で南北方向に設定した。また、遺跡は東西に長いために、便宜的に30ライン以西をA区、以東をB区とした。B区からは、縄文時代晩期の配石遺構（図版5－3）や平安時代の竪穴住居跡などが検出されたが、A区に比べて遺構・遺物共に希薄であった。



第1図 狐岱遺跡の位置と周辺の遺跡

1 : 狐岱 2 : 冷水岱 3 : 吉野II 4 : 吉野I 5 : 山崎
6 : 長野岱I 7 : 根小屋岱I 8 : 愛宕堂 9 : 石倉沢



第2図 狐岱遺跡の立地とA・B区

2 遺跡の立地と周辺の遺跡

狐岱遺跡は、秋田県の北部中央にある鷹巣盆地の南端に位置する。

米代川の支流である阿仁川は森吉山系に源を発し、山間を縫うように北流して、狐岱遺跡付近で広義の鷹巣盆地^(註4)に入る。阿仁川はその流路に5面の河岸段丘を形成し、狐岱遺跡はこのうちの低位から2番目の砂礫段丘上に立地している(図版1-1)。この低位から2番目の段丘は上下2面あり、高い方が砂礫段丘Ⅳ⁺(Higher lower)、低い方が砂礫段丘Ⅳ^(註5)(Higher lowest)である。狐岱遺跡においても、この2面が存在する。

阿仁川によって形成された低位から2番目の段丘面は、米内沢付近では、本遺跡の南側にある大森山丘陵の北縁を取り囲むように幅300~500mで分布し、阿仁川に注ぐ小さな沢によって幾つかに区切られてる。狐岱遺跡は、このようにして区切られた段丘面の北縁に位置し、北東~北側は阿仁川が裾を洗い、西側と東側には前述の小さな沢が存在する。この東西の小さな沢間の距離は約800mあり、狐岱遺跡は長さ(南東-北西)約850m、幅(北東-南西)100~250mという広い範囲を占め、推定される面積は約15万m²である。狐岱遺跡A区は遺跡の西半部分に当たり、前述の2面の段丘面からなっている。遺跡における砂礫段丘Ⅳ⁺の標高は45~49m、砂礫段丘Ⅳは41~43mで、両者の間には、比高差約4mの明瞭な崖面が存在する。また、A区の南側には、湧水等を集めた極めて小さな沢があり、遺跡の南側を限っている(第2図)。

狐岱遺跡からは、縄文時代前期から晩期までの遺構・遺物が出土しており、このうち遺構・遺物共に主体を占めるのが前期後葉~中期後葉である。第1図には、狐岱遺跡周辺の縄文時代~中期の遺跡^(註6)(4,5を除く)の位置を示した。吉野Ⅱ遺跡(3)が前期、愛宕堂遺跡(8)が中期の遺物を出土する以外は、いずれも前期と中期の遺物が出土している。この中では、南側の小さな沢を隔てて位置する冷水岱遺跡や、東側の吉野Ⅱ遺跡などが、隣接する遺跡として本遺跡との強い関連性が窺える。また、直線距離にしてわずか700mしか離れていない長野岱^(註7)I遺跡も、本遺跡に先行する時期に阿仁川の北岸に存在した遺跡として見る事ができる。

なお、昭和29年に大和久氏が発掘調査したA・B地点は、当時の地形が変化するなどしているために、確実な地点を押えることができなかったが、森吉町在住の加賀利男氏の教示によれば、第3図に点線で示した遺跡西端部辺り(1区、2区)であろうと思われる。

3 土 層

遺跡が広大であること、人為的に盛土された部分が存在することなどから、地山に至るまでの土層は地点によって相当に異なっている。また、範囲確認調査では、各トレンチや遺構・捨

場などの正確な土層断面図は作成しておらず、約20mに1箇所の割合で、模式的な土層図を作成したにすぎない。従ってここでは、狐岱遺跡A区の模式的な層位を示すことしか出来ない。

第1層 黒色～黒褐色土（層厚10～25cm）：いわゆる黒ボク土で、畑の耕作土となっていた部分もある。土堤状盛土遺構の44ライン～51ラインまでの間には明瞭な黒ボク土がなく、その部分では黒褐色の表土中に多くの遺物を含んでいる。

第2層 黒褐色土（5～10cm）：見た目にはチョコレート色を呈する。この層の上位面に、大湯浮石と考えられる火山灰が極く微量堆積している場合もある。土堤状盛土遺構や捨場には全く存在せず、上位段丘面でも分布している範囲は少ない。

第3層 黒褐～黄褐色土（15～50cm）：遺物包含層で、地山粒子や木炭、焼土粒子なども含む。「広場」では、この層が薄くほとんど見えない部分もあるが、逆に土堤状盛土遺構や捨場などではこの層が主体を占め、多量の遺物を含み、重層をなす。

第4層 黄橙～黄褐色土（5～10cm）：地山漸移層で、基本的には遺物を含まない。

第5層 黄橙～黄褐色土：地山土である。竪穴住居跡の多い部分などでは粘性を帯びたローム土（段丘堆積物と考えられる）であるが、地点によっては段丘礫層、風化軽石土、砂質土であったりする。

4 検出遺構

狐岱遺跡A区には2面の河岸段丘が存在するが、ここでは上位の段丘面から検出された遺構などについて触れる。第3図が、A区の遺構分布図である。

検出された遺構は、竪穴住居跡、土坑、組石棺墓、焼土、埋設土器などの他に、巨大な捨場と土堤状盛土遺構がある。これらの遺構は伴出している土器から、縄文時代前期末葉～同中期後葉に属するものと思われる。

(1)土堤状盛土遺構

A区の上位段丘面に立つと、下位段丘面との境をなす段丘崖から70～80mの距離を持って、この段丘崖のラインに平行する形で僅かに高い自然堤防状の高まりが見える（図版1-2）。これは当初、自然にできた地形かと思われたが、トレンチ調査の結果、地山土などを人為的に盛り上げたものであることが判明した（図版2-1）。盛土の大部分は、本遺跡の地山土である黄橙色ローム土で、その中には多量の土器や石器及び木炭が入っており、地点によってはこれらが互層をなしている部分も存在した。また、この盛土部分において本来の地山土まで掘り下げた部分では、殆ど例外なくその下に竪穴住居跡の床面が確認される（図版1-3）。盛土の規模は高さ0.8～1.5m、幅10～20mあり、その範囲は第3図のスクリーントーンの部分で、

総延長は約470 mにも達する。盛土が厚いのは、45～49ラインと50～51ラインの部分で1.2～1.5 m、他は0.8～1.0 mである。49と50ラインの間には南側から短小な沢が入り込んでおり、この部分の盛土は途切れている。

このような盛土の主体を占める地山土は、後述するように、土堤状盛土遺構と捨場との間にある「広場」から持って来たものと推定されるが、縄文人がこの部分に竪穴住居を作り、それを廃棄する毎に地山土で埋めて行った過程が想像される。

(2) 竪穴住居跡

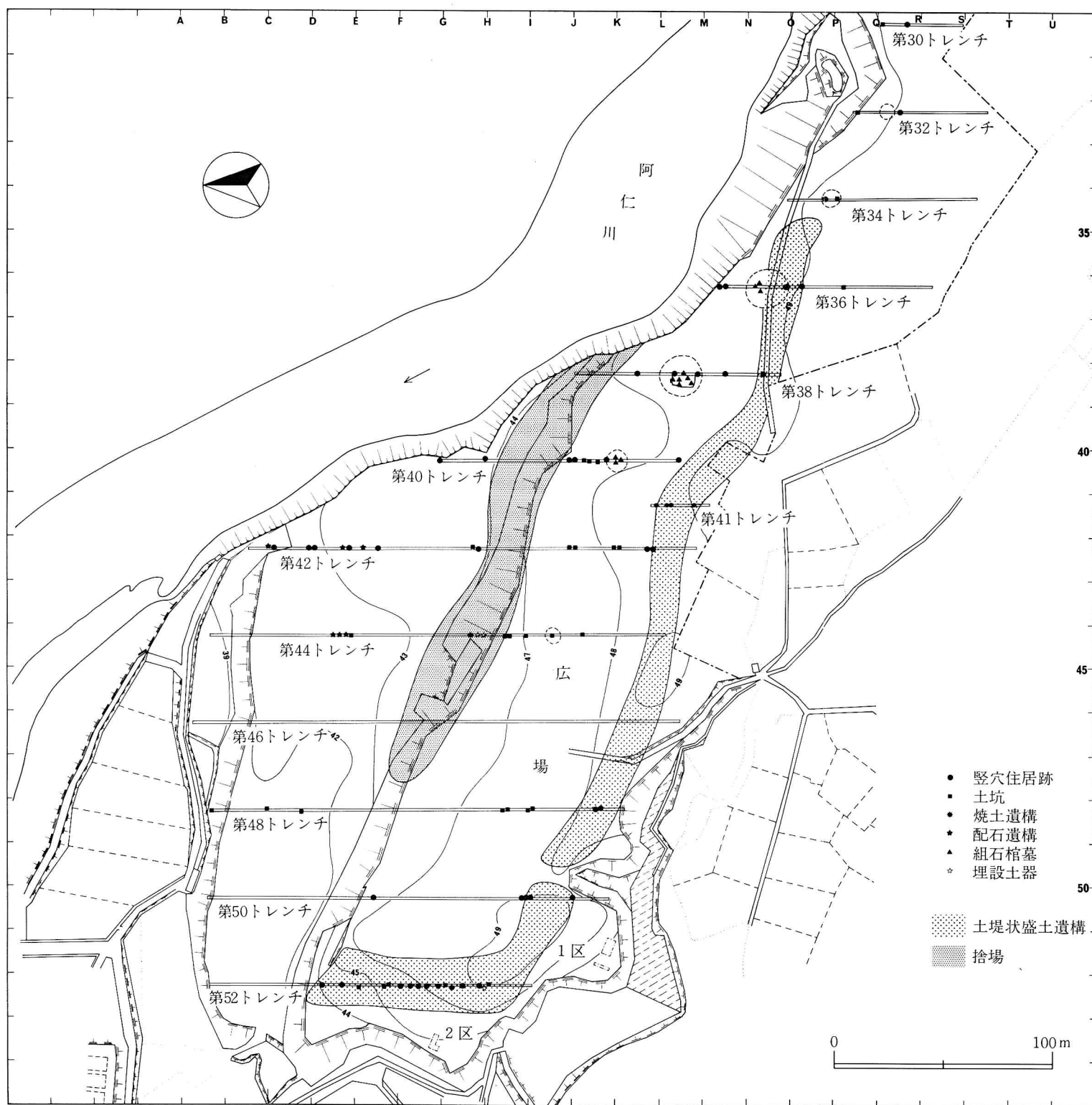
A区の上位段丘面上からは、幅約1 mのトレンチを40 m間隔に入れただけの調査にも拘らず、計36軒の竪穴住居跡が確認されている（図版2-2）。竪穴住居跡の大部分は、土堤状盛土遺構の下及びその周囲に集中するが（図版2-3）、40ライン以東では、土堤状盛土遺構から離れた部分にも多数存在している。このように、調査した部分と未調査の部分、及び調査はしても確実に竪穴住居跡が存在すると推定されるためにその確認面まで掘り下げなかった部分も考慮すると、A区上位段丘面上に存在すると推定される竪穴住居跡の総数は、500 軒は下回らない数で、1000軒にも達すると思われる。

調査の性格上、個々の竪穴住居跡の規模や平面形、時期などの詳細は不明であるが、周囲から出土している土器によれば、52ラインで検出された竪穴住居跡が最も古く（前期円筒土器下層c～d式頃か）、順次南東側に向かって新しくなり、38及び36トレンチ周辺では中期後葉、30ラインでは後期前葉と考えられる。従って、一時期にどのくらいの数の竪穴住居跡がどのくらいの範囲で存在したか不明であるが、北西端部に始まった集落が順次南東方向にその位置を移動して行ったものと見ることができる。また、これらの竪穴住居跡の埋土を見ると、前述のように、土堤状盛土遺構の下に存在するものは、確実に地山土などで人為的に埋め戻されたとわかるものが大部分であるが、その他には、埋め戻されることなく、自然に埋ったと考えられるものが少数存在している。

(3) 捨 場

狐岱遺跡A区の上位段丘面上の集落は、縄文時代前期後葉から中期後葉もしくは後期前葉まで連続しており、そこで使われ廃棄された土器や石器などの遺物量は膨大なものになると考えられる。それらの一部は、土堤状盛土遺構中からも出土しその量も多いが、遺物の大部分は、段丘崖面の捨場に集中する（図版3-1）。

A区に2面存在する河岸段丘面は、比高差約4 mの段丘崖で区別されるが、この段丘崖は、47ライン以西で傾斜が強くなり明確であるのに対し、47ライン以東では緩斜面となり、一部では崖面が崩れたような部分も観察される。この47ライン以東の段丘崖面を深掘りしたところ、地山と思われる黄橙色土が現れるが、子細に観察するとそれらは炭化物や焼土が混じっており、



第3図 狐岱遺跡A区 地形図・グリッド図・遺構分布図

さらに掘り下げると遺物を含む暗褐色～黒褐色土が現れる。このようなことを数回繰り返してやっと本来の地山土に達することが出来た（図版3-2・3）。そのようにして深く掘った部分の現表土からの深さは、最も深い部分で3.5m、平均でも2.5mで、巨大な捨場であると判明した。この捨場は、第3図の細かいスクリーントーン部分で、長さ約220m、幅20～35m、長さ2～3.5mの規模である。この捨場から出土した遺物の検討はほとんど進んでいないが、46ラインの下部からは前期後葉の土器が出土しており、それから順次南東に行くにつれて時期を新しくし、38ラインでは中期後葉の土器を主体としている。なお、この捨場は38ラインの東側で切れているが、それ以东は阿仁川が裾を洗う急斜面で、現在でも時折土砂崩れを起こしている。従って、この捨場は本来もっと東側に延びていたものと思われる。

(4)「広場」

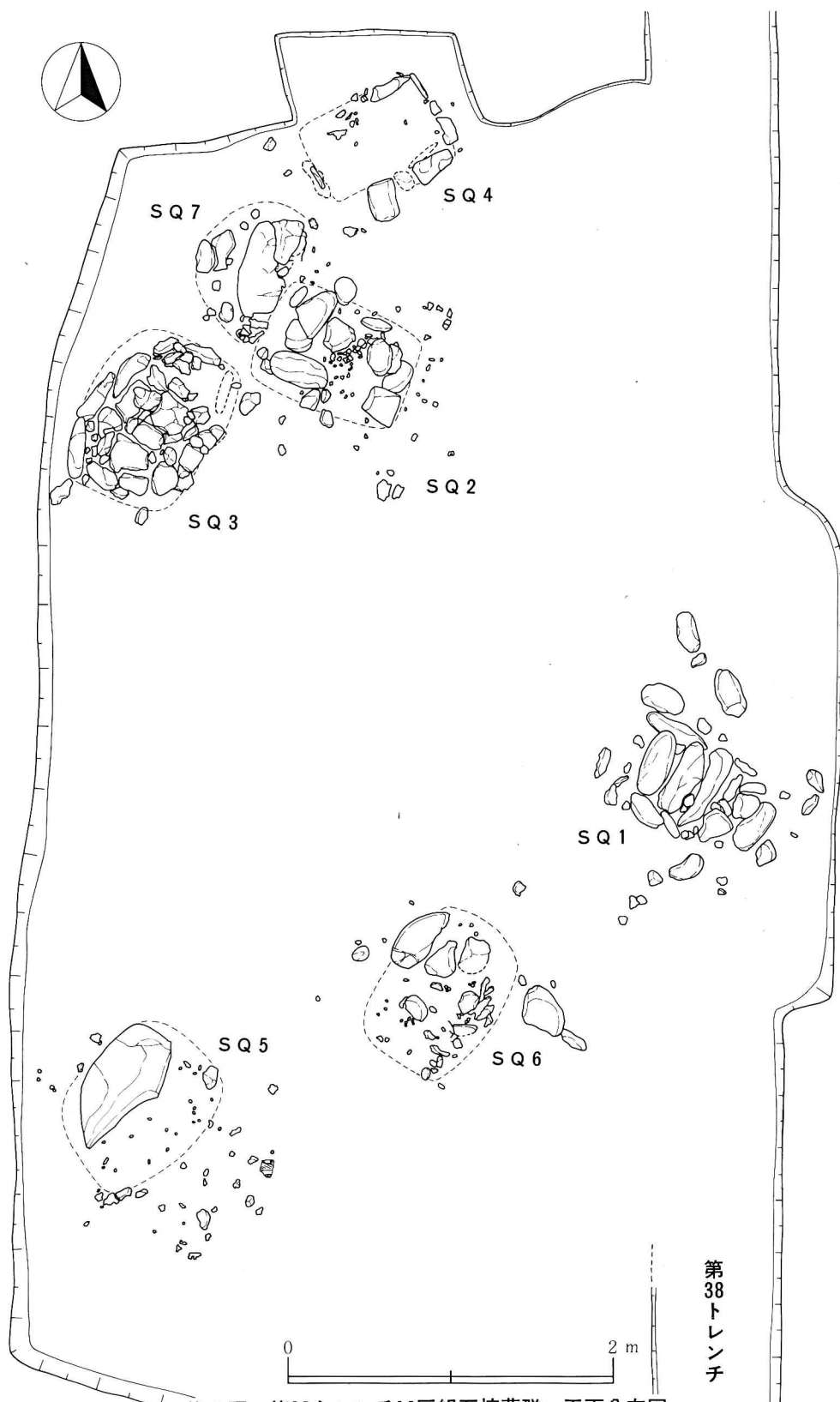
A区上位段丘面の中央部、土堤状盛土遺構と捨場に囲まれた平坦な部分の50ラインから42ラインにかけては、遺物がほとんどなく、堅穴住居跡も見い出されていない。存在する遺構は、長径1m前後の円形や楕円形を主とする土坑と、径50～80cm深さ50～70cmの柱穴様ピットである。土坑や柱穴様ピットがどのような配置になるかは不明であるが、種々の集落の在り方から見て、この部分を「広場」と仮称しておきたい。しかし、前期後葉から中期後葉に至る間の細かい時期における「広場」が、どのような形態で、各期における範囲がどの程度であったかについては不明である。なお、少なくとも40ライン以东には、40ライン以西の「広場」に当たる位置に中期末葉の組石墓群が存在することから、ここでいう「広場」は40ライン以西においてのことであり、中期後葉前半頃までのことと考えられる。

ところで、前述したように、土堤状盛土遺構や捨場には多量の地山土が持ち込まれあるいは投棄されている。それらの地山土の供給先はどこであろうか。この「広場」には、周囲の土層と異って段丘礫層の直上に存在するはずの黄橙色ローム土を欠いている。黒色の表土（かつての畑の耕作土）の下は、段丘礫層もしくは砂礫層である（部分的に両者の漸移層となる砂質の褐色土が存在する）。今回の調査では、縄文人が、段丘礫層上に存在したはずの黄橙色ロームを掘り出し、運んだ形跡を検出することはできなかったが、捨場と土堤状盛土遺構に供給された地山土は、この「広場」の地山土であった可能性が強い。

(5)組石棺墓群

「広場」の東側の広い部分に、主に細長い河原石を長方形もしくは楕円形に組み、その上に同様な河原石や扁平な石などで蓋をしたと考えられる「組石棺墓」が、群をなして数箇所^(註8)に存在する。この組石棺墓群には、少なくとも3基以上の組石棺が集中しており、40・38・36ラインには確実に存在し、34・32ラインあるいは44ラインでもその可能性がある。

第4図は第38トレンチM区で検出された組石棺墓群で、約4.5m×8mの範囲を拡張したも



第4図 第38トレンチM区組石棺墓群 平面分布図

のである（図版4-1^{（註9）}）。この範囲内で確実に7基の組石棺墓が存在し、周囲も含めて精査すれば、その数が増えることも確実である。

SQ1は、長さ20～40cmの扁平な河原石を、長さ100～110cm、幅約70cmの箱状に組み、その上に長さ40～50cmの扁平な河原を長軸に直交させて蓋石にしたものである（図版4-2）。

SQ3は、板状に割れる軟質の泥岩もしくは凝灰岩を長径110cm、短径80cmの小判型に組み、同様な石材で蓋をしたものである（図版4-3）。

SQ4はSQ3と同様な石材で、内寸80cm×50cmの整った長方形になるように側石を立て並べている。蓋石は畑の耕作等で除去されたものと考えられる。

SQ5は、長径80cm幅40cm厚さ30cm以上の巨大な凝灰岩を主体とするものであるが、図の点線部分の土色が周囲とは明らかに異なっている。この下がどのような構造になっているか不明であるが、これも組石棺の1つであると考えられる。

SQ7もSQ5と同様に大きな石を主体とするものであるが、SQ2と重複している。

これらの組石棺はSQ1・6・5が1列、SQ3・2・7・4が1列の2列が平行するように見えるが、精査を全く行っていないためその詳細は不明である。また、これらの組石棺は、明らかに人為的に盛られた土を掘り込んで構築されている。38トレンチの土層観察では、その盛土の範囲は径10m前後と思われる、その部分は周囲よりもわずかながら高く、マウンドをなしているようにも見える。なお、この盛土の下方には、トレンチ部分で、一部住居跡の床面と思われる面を検出しており、この組石棺墓群は、竪穴住居跡を埋めてできた低いマウンドの上に構築された可能性もある。これら組石棺墓群の周囲からは、中期後葉大木10式もしくはこれに平行すると考えられる土器片が出土しており、同期の破片を用いた円盤状土製品が他の部分よりも目立って多い。

図版5-1は、40トレンチにおける組石棺墓群の状況で、中央部の巨大な石は、蓋石として用いられたものと考えられる。図版5-2は、36トレンチの組石棺墓群で、周囲には畑の耕作等で除かれた大きな河原石が散見される。

なお、これら組石棺墓の蓋石などに用いられている凝灰岩あるいは泥岩は、A区北側裾の阿仁川岸に岩脈として露頭しており、他の河原石と共に遺跡まで運び込まれたものと考えられる。

5 出土遺物

トレンチの掘削をバックホーで行ったため、採集出来なかった遺物も多いが、A区だけで大コンテナ（内寸54×33.5×20cm）で70箱以上の土器や石器が出土している。しかしながら、これら遺物の整理作業は進んでおらず、ここでその詳細を報告することが出来ない。

しかし、各トレンチから出土した土器について見ると、調査区西端の第52トレンチからは前期円筒土器下層d₁式～中期円筒土器上層a₂式（少量だが下層b、c式を含む）、中央部の第44トレンチからは円筒土器上層a₁～e式（大木8a～9式を少量含む）、東部の第38トレンチからは円筒土器上層e式及び大木8b～10式、などが出土している。このことから明らかに、各トレンチ（特に捨場）からは、4～6型式前後の土器が出土しており、全体としては、西端部ほど古い時期の土器が多く、東に行くにつれて時期が新しくなっている。

図版6は、出土した土器の一部を復原したものである。1・2が52トレンチI・G区、3～8が44トレンチから出土したもので、3・4・6～8は捨場出土である。1は、筒形の胴部に外反する短い口縁部の付く小型土器である。平口縁と思われ、口縁部文様帯には撚糸の側面圧痕文が5条、胴部には木目状撚糸文が施されている。円筒土器下層d₁式と思われる。2は、筒形の胴部に外反する短い口縁部が付された大型の深鉢形土器である。4つの波頂部を持つ波状口縁を呈する。中央で大きく割れた波頂部中央には小さな突起があり、突起の下には小さな橋状把手が付されている。口縁部文様帯には撚糸の側面圧痕文が口縁に平行して施され、文様帯下端には隆帯が貼付され、隆帯上と口唇部には、2種類の撚糸の側面圧痕文が縦位の刻目状に施されている。また、波頂部と波頂部の中間に当たる口縁部文様帯の下方には、2個1対の突起が縦位に貼付されている。胴部文様は、LR2本の結束回転文で、原体の端を結んで出来た綾絡文が部分的に見えている。この土器は次の3と共に、大和久氏が「仮称狐岱式」^(註10)とした類の一つで、後に上層a₁式としたものである。^(註11)3も2とほぼ同様の土器であるが、口縁部文様帯の横位の側面圧痕文間に、縦位の側面圧痕文が施されている点と、胴部文様が結束羽状縄文のみであることが異なっている。4の器形も概ね2・3に等しいが、小型で、4つの波頂部下には山形の隆帯文、その下に円形の貼付文を有する。口縁部文様帯には、撚糸の側面圧痕文と原体端の押圧による刺突列が併用されている。上層a₂式かと思われる。5は、平口縁で、口縁部外側が若干肥厚しており、文様帯が2～4に比べて幅広である。文様は、頸部やや上方から付された羽状縄文を地文とし、その上に粘土紐を貼付し、粘土紐の上に側面圧痕文を施している。また、口縁端には2個1対の貼付文が器周五箇所^(註12)に付されている。上層c式である。6は、4個の花弁状突起を有する波状口縁の深鉢形土器である。花弁状突起部には粘土紐が縦位と横位に貼付され（縦位の粘土紐は一箇所のみ5本で、他は3本）、そこから1本の粘土紐が垂下している。肥厚する口縁端部には斜位の刻みが施されている。口縁部から胴部には撚糸のゆるい斜行縄文が施され、一部（4分の1）にのみ下描き風の浅い弧線が描かれている。上層d式もしくは、d～e式の間のものであると考えられる。7は胴部下半が丸味を持ち、短い口縁部がわずかに外反する深鉢形土器である。口縁は、先端が半円状に割れた4つの突起を持つ波状口縁で突起部にのみ粘土紐が表裏同形に付されている。胴部には斜行縄文が付され、胴部上半

から口縁部にかけての文様帯には、ゆるく波打つ3条1組の沈線が3段に描かれ、突起部下のみ2条1組の沈線で連絡している。上層e式もしくはこれに後続するものと考えられる。8は平行縁であるが、文様の構成等はほぼ7に等しい。口縁部上位に粘土紐を貼付した隆帯を有し隆帯上には縄文の側面圧痕文が付されている。

土器以外の遺物では、土製品や石器・石製品が出土している。土製品としては、板状を呈した大型の土偶の破片、三角土製品、土器片を利用した円盤状土製品があり、石製品には、石冠状石製品がある。また石器には、石鏃・石匙などの定型的な剝片石器の他に、半円状扁平打製石器・石錘・石皿などの礫石器や磨製石斧などがある。

6 まとめ

以上、平成元年6月に実施された狐岱遺跡範囲確認調査のうち特に遺構・遺物の多かったA区について、その要点を述べて来たが、今回の調査によって判明した事実・問題点は大きく、多岐にわたる。

土堤状盛土遺構は、1つの集落の人々が縄文時代前期後葉から中期後葉まで、住居跡を埋め戻す等の行為を連綿と繰り返し行った結果できた遺構であると思われるが、全体として、これほどの規模の土木工事は該期にあっては殆ど類例を見ないものである。また、群をなす組石棺墓は該期の葬制のみならず、これに後続する葬制及び集落の在り方を考える上で、又とない資料の1つであると考えられる。そしてそれよりも何よりも、数型式の土器群が明瞭な層位を持って堆積している巨大な捨場は、もしこれを層位的に調査すれば、秋田県北部における縄文時代前期後葉から中期後葉（もしくは後期前葉まで）の土器編年が層位的に可能であり、なおかつ円筒土器上層様式と中期大木土器様式の対比が出来ることは疑いない。

なお、整理の進んでいない出土遺物については、整理の終了を待って、これを報告したいと考えている。

註

註1 大和久震平 「北秋田郡森吉町米内沢狐岱遺跡調査報告」 『昭和32年度調査研究報告書』
秋田県文化財保護協会 1958（昭和33年）

註2 秋田県文化財調査報告書第179集 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県教育委員会
1989（平成元年）

註3 調査担当者は柴田陽一郎、武藤祐浩、大野憲司である。

註4 奥山 潤 『長野県Ⅰ遺跡』 森吉町教育委員会 1967（昭和42年）

註5 秋田県農政部農地整備課 『大台野開発計画 地域土地分類基本調査 米内沢』
1978（昭和53年）

註6 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図』 1976（昭和51年）

このうち3, 4, 5は1988年の分布調査で発見され、吉野Ⅰ遺跡（4）からは縄文時代の、
山崎遺跡（5）からは平安時代の遺物が出土している。

註7 註4に同じ。

註8 時間的に余裕がなく層位毎の調査が出来ず、また土層断面図を取ることもできなかった。

註9 この「組石棺墓」については、平面的に確認したのみで、底面の状況や掘り方、構築順序
等は全く不明であるが、明らかに石を棺状に組んでおり、現状においての名称は、奥山潤氏
が矢石館遺跡の配石墓に用いた「組石棺」がこれに最もふさわしいものと思われる。

奥山 潤 「縄文晩期の組石棺」 『考古学雑誌』40巻第2号 1953（昭和28年）

註10 第4図は、現場で全ての平面図を取ることが出来なかったので、各組石棺の一部の石を実
測し、スケールを入れた真上からの写真撮影を行い、これをもとに完成させた平面図である。
従って細部については多少の誤差が生じているものと思われるが、配置も含め概ね実態に合
ていると考えている。

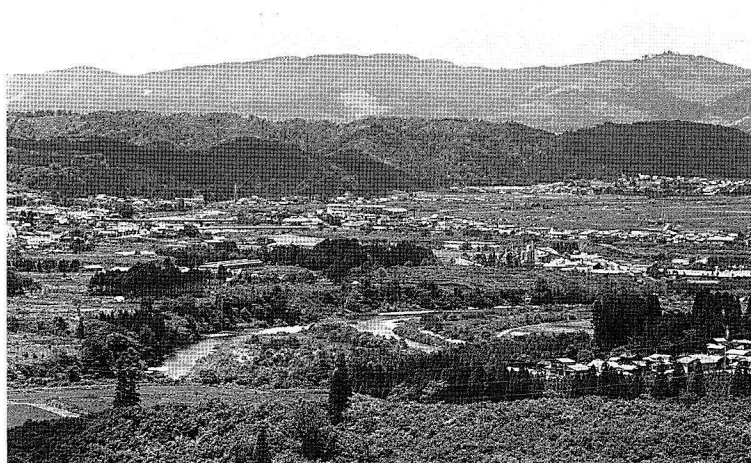
註11 註1に同じ

註12 大和久震平 「円筒上層式の細分」 『秋田考古学』 第16号 秋田考古学協会
1960（昭和35年）

1 狐岱遺跡A区遠景

(東から)

中央やや下方が阿
仁川で、その河岸
段丘上に遺跡が立
地している。



2 上位の段丘面の

状況(南東から)

写真左側から土堤
状盛土遺構が「形
に続いている。



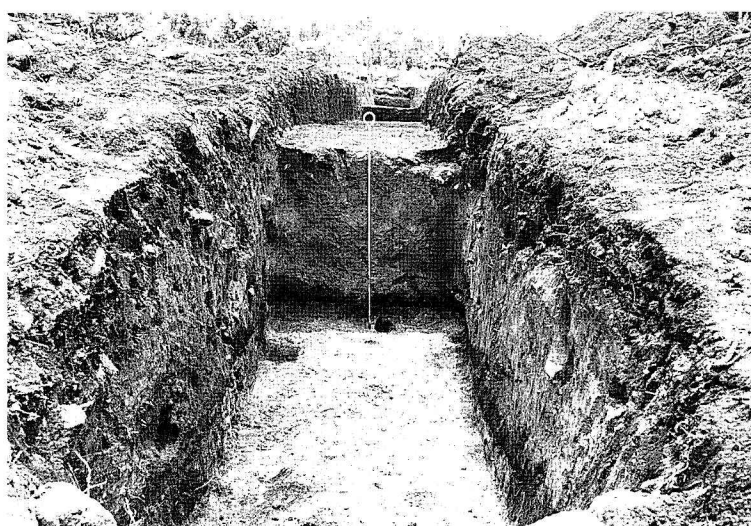
3 土堤状盛土

遺構断面

(第41トレンチ

L区 北から)

盛土の下に竪穴住
居跡の床面が見え
ている。

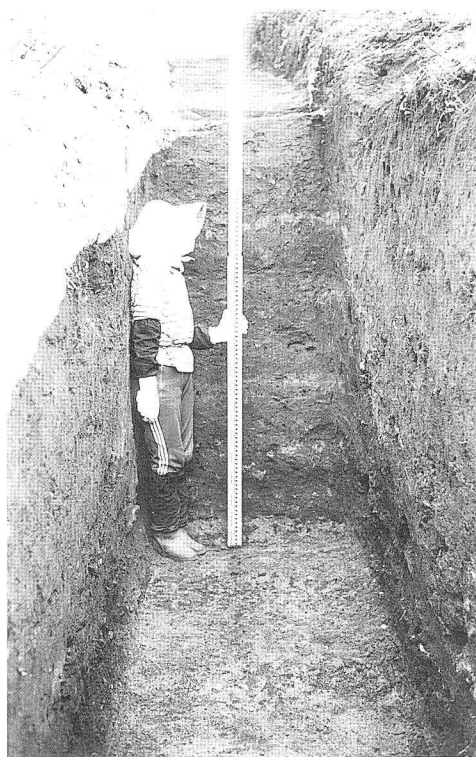




1 2つの段丘面
(第42トレンチ
北から)
白いビニールテ
ープ部分が、
捨場となっている。



2 捨場の断面
(第44トレンチH区 北から)
多量の遺物が地山土などに狭
まれて、2.5m以上の厚さに
堆積している。



3 捨場の断面
(第42トレンチI区 北から)



1 組石棺墓群

(第38トレンチ
M区 南東から)
確認面までは、現
表土から約20cm程
度しかないものも
ある。



2 S Q 1 組石棺墓

(上が南東)



3 S Q 3 組石棺墓

(上が南西)

1 組石棺墓群

(第40トレンチL
ーK区 東から)
大きな凝灰岩の蓋
石と考えられる。



2 組石棺墓群

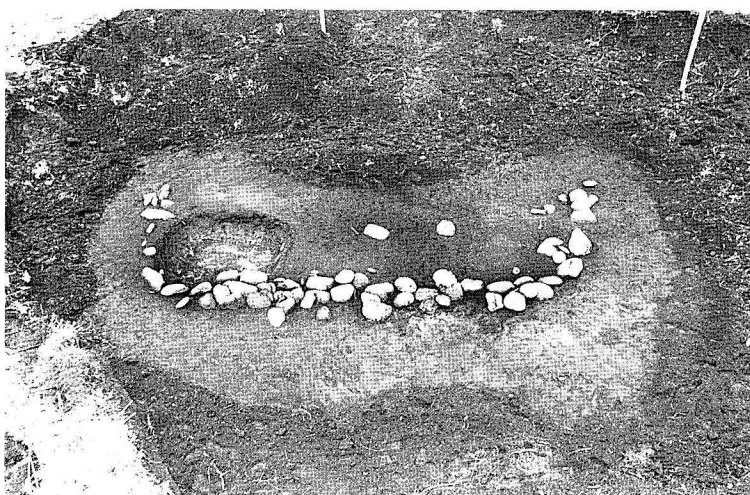
(第36トレンチ
O区 南から)
3基以上の組石棺
墓が確認されてい
る。



3 B区 縄文時代

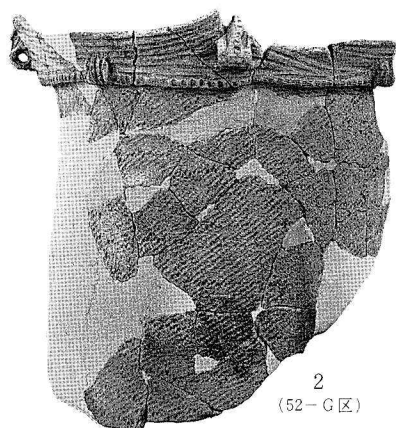
晩期の配石遺構

(南から)
北に開くコの字形
で長さは約6m。

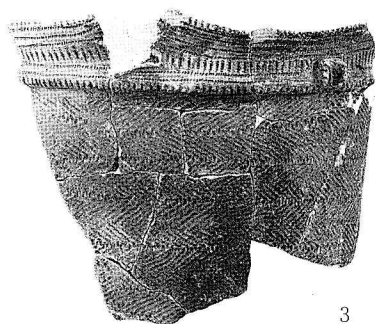




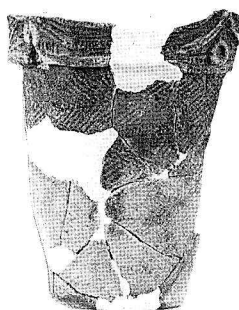
1
(52-1区)



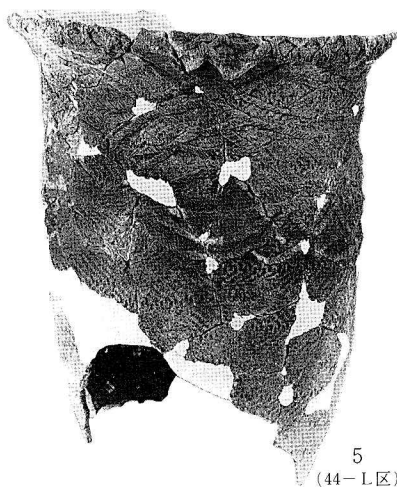
2
(52-G区)



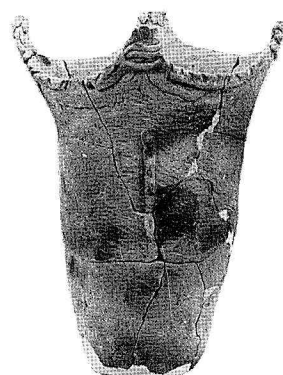
3
(44-H区)



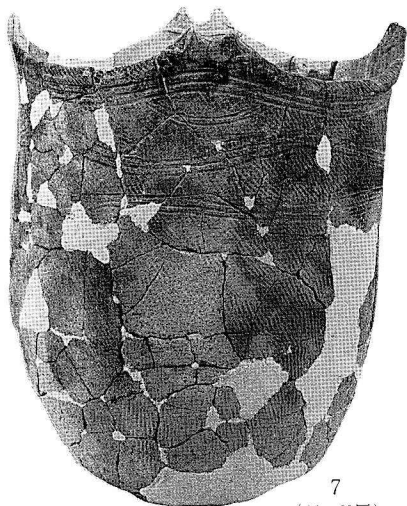
4
(44-H区)



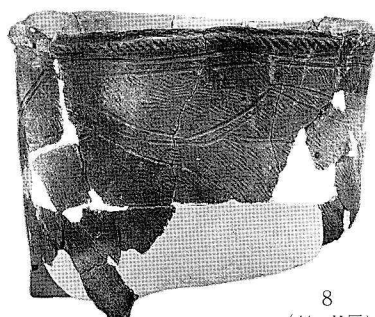
5
(44-L区)



6
(44-H区)



7
(44-H区)



8
(44-H区)

(縮尺は約 $\frac{1}{6}$)